

国際交流センター

学生が広い視野を育めるよう、海外での学びを積極的に推進しています。
その一環として協定校を拡大し、多様な国際交流の機会を提供しています。

シンガポール研修

(ナンヤン理工学院/9日間)

【対象学科】

看護学科、医療福祉学科、
幼児保育学科、学校教育学科、
こども学科

多民族国家・シンガポールの医療福祉施設やインクルーシブ教育の現場を見学し、その先進的な取り組みやシステムを学ぶとともに、多様な言語や文化的背景を持つ人々への理解を共に深めていくプログラムです。



オーストラリア研修

(イーディスコーワン大学/11日間)

【対象学科】*

理学療法学科、作業療法学科、
柔道整復学科、東京理学療法学科、
東京柔道整復学科、看護学科、
医療福祉学科、こども学科、
幼児保育学科、学校教育学科

各学科に関連する多様な内容が組み込まれ、講義、施設・病院訪問、高齢者との交流、学校訪問などを通じてオーストラリアの教育・医療・福祉の実際を体験的に学びます。



*開催についての最新情報は本学HPをご確認ください。
※2027年4月より学科・コース名変更(計画中)
理学療法学科→医療科学科 理学療法士コース
柔道整復学科→医療科学科 柔道整復師コース
作業療法学科→医療科学科 作業療法士コース

詳細は
こちらから！



University Festival

帝京科学大学学園祭

東京西・千住の両キャンパスで学園祭を開催。
実行委員の学生を中心に、大いに盛り上がるイベントです。

科大祭(東京西キャンパス)

科大祭実行委員長 恵畑 太稀

今年度の科大祭は、10月17日(土)・10月18日(日)に開催を予定しています。学生だけでなく地域の方やお子さんまで、来てくださった皆さまが笑顔で楽しめる学祭をめざして科大祭実行委員会を中心に準備を進めています。科大祭実行委員会は現在、1～4年生合わせて120人以上です。先輩後輩の交流を深めるため、最近では運動会を開催しました。「また来たい!」と思ってもらえるような思い出に残る2日間になるよう、実行委員全員で協力しながら盛り上げていきたいです。



桜科祭(千住キャンパス)

桜科祭実行委員長 太田 有星

今年度の桜科祭は、10月31日(土)・11月1日(日)の2日間で開催します。今年度も例年通り開催できるのは、実行委員をはじめ多くの方々のご協力のおかげです。心より感謝申し上げます。今年も多くの方が実行委員会に参加し、より一層大学生らしさを感じていただける内容にできればと考えています。在学生だけでなく、ご来場くださったすべての皆さまに楽しんでいただけるよう準備していきます。10月31日、11月1日にぜひ千住キャンパスへお越しください! 桜科祭実行委員一同、心よりお待ちしております!



*開催についての最新情報は本学HPをご確認ください。

編集後記

昨年度より巻頭企画として、帝京科学大学でホットな話題を特集しております。第39号では自然環境学科で実施している世界自然遺産実習のうちの知床実習・奄美実習を特集しました。このような実習を実施している大学は全国でも珍しく、実習に参加した学生は多くの学びを得ることが出来たようです。ニューズレターを通して帝京科学大学の特色を発信していきますので、今後ともご支援のほどよろしくお願い申し上げます。

【ニューズレター部会長 橋本 慎治】

いのちをまなぶキャンパス



帝京科学大学

【発行人】
帝京科学大学 学長 沖永 莊八

〒120-0045
東京都足立区千住桜木2-2-1
TEL:03-6910-1010(代表)



Teika News Letter

VOL.
39

フィールドワークの先に見つけた、
私たちの好奇心

世界自然遺産実習
Journey

知床半島
& 奄美大島編

卒業生に会いに行く
両親への手紙

知床半島編

シャチ・ヒグマ・エゾシカ・シマフクロウなど
日本を代表する大型動物の生態、
人間活動との関係について学びます。
鯨類はクルーズ船から観察し、
エコツアーリズムを体験するとともに、
基礎的な観察や記録方法を習得します。



下岡 ゆき子 教授
生命環境学部 自然環境学科
(専門分野) 霊長類社会生態学、行動学

野生動物との出会いが 学生の成長を後押しする

シャチの特徴的な白い目玉模様が見えた瞬間、
学生たちは一人一台持参した大学の一眼レフカ
メラで夢中になって連写。「噴気がしっかり撮れ
ています！」と興奮気味に声を上げる姿が印象
的でした。学生たちは、実習後の振り返りを経て、
何度も現地に足を運び、時間をかけて観察す
ることで野生動物の実態が見えてくることを実
感。「次はいつ行く？」と計画を立て始める姿も
見られました。「連れていってもらおう」から「自分
たちで動こう」へ、主体性が芽生え、成長するの
を感じました。

フィールドワークの先に見つけた、 私たちの好奇心

世界自然遺産実習Journey

[環境特別実習II]
自然環境学科では、生物や自然を五感で学ぶ
フィールドワークを数多く実施。
今回は、世界自然遺産である知床半島と
奄美大島での実習の様子をお届けします。

その他の実習先 | 小笠原諸島・屋久島 など

知的好奇心を
刺激する
野外実習！

奄美大島編

アマミノクロウサギ・ルリカケス・ケナガネズミなど
固有種が数多く生息する奄美大島。
亜熱帯の原生林に特有の生態系を観察し、
人為的な攪乱から自然が回復していく過程を体感します。
また、自然海岸の護岸工事を題材に、自然環境保全と
開発をめぐる多様な考え方への理解を深めます。



片桐 浩司 准教授
生命環境学部 自然環境学科
(専門分野) 陸水学、保全生態学、生態系管理学

希少な生き物をどう守るか 自然と人との共生を学ぶ

ナイトツアーでは経験豊富なツアーガイドさんの
案内で、天然記念物のケナガネズミやアマミノク
ロウサギの生態を観察しました。途中、ケナガネズ
ミが車の下に入り込んでしまうハプニングもあり、
学生たちは大興奮！夜の森でリュウキュウコノハ
ズクの鳴き声を聞く場面では、耳を澄ませる学生
たちの真剣な表情が印象的でした。護岸工事と環
境保全の狭間で揺れる嘉徳浜では、工事に反対
する人々の声にも耳を傾け、持続可能な社会のあ
るべき姿を考えるきっかけになりました。



エゾシカの多さは事前学習で知っていた
のですが、想像以上の数を至近距離で
観察でき、迫力がありました！

松島 帆海 さん
生命環境学部 自然環境学科 4年生

世界最大のフクロウで、絶滅危惧種の
シマフクロウを夜中まで観察！間近で
見られる貴重な機会でした。

守屋 春輔 さん
生命環境学部 自然環境学科 4年生

奄美大島はいまにも恐竜が現れそう
で、映画の世界に入り込んだような
場所でした。満天の星と、透明度
抜群の海が印象に残っています。

川端 実玖 さん
生命環境学部 自然環境学科 3年生

アマミオオガエルが見た
くて、鳴き声を頼りに夜の
山に探しに行きました。
ハザに注意しながら探した
コトが思い出です。

降旗 円香 さん
生命環境学部
自然環境学科 3年生

嘉徳海岸の護岸工事反対
運動をしている方の話が印象
深いです。教科書にはない
学びにふれ、現場に行くこと
の大切さを感じました。

金丸 結菜 さん
生命環境学部
自然環境学科 3年生

教員活動報告 Faculty activity report

授業・研究における学生たちとの過ごし方

生命環境学部 Faculty of Life & Environmental Sciences

アニマルサイエンス学科

永澤 巧 助教



猫と飼い主の会話を
知りたい!

ニーズが高まる愛玩動物看護師 飼育体験や現場の声を聞き、進路の参考に

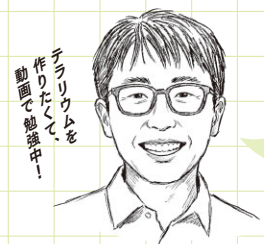
本学科では、動物病院を中心に活躍する愛玩動物看護師を養成するコースが設置されています。現在、看護師の職域は広がると予想されており、時代のニーズにも対応できる広い視野を持つことが求められています。そのため、千住キャンパスでは「動物看護基礎実習Ⅰ」「アドバンスト実習」などを通じて、動物園・農場・実験動物施設、また東京西キャンパスとも連携してブリコラや馬介在活动センターなど、犬猫のような愛玩動物に限らない多様な現場を見学します。飼育体験や現場スタッフの声を聞くことで、広い視野を持ち、研究や自身の進路を決めていけるようサポートしています。



馬介在活动センターでの実習の様子

自然環境学科

酒井 理 講師



テラリウムを
作りたくて
動画で勉強中!

学生の興味や趣味を 科学的な学びに深めていく

自然環境学科には個性豊かな教員が在籍しています。私も2026年4月から、その一員となりました。専門は動物行動学で、主に爬虫類・両生類を対象に、自然の不思議を探究しています。着任以来、自然が好きな学生が多く、鳥や昆虫、植物など、各自が興味を持つ生き物について豊富な知識があることに感心しています。野外実習では、見つけた生物について学生同士が教え合い、学びを深める姿が印象的でした。生き物に詳しい学生も、これから学び始める学生も、お互いに高め合い、趣味から一歩進んで「科学」という観点から自然を捉えて探究する—そんな教育・研究環境の構築をめざします。



ムカシツチガエルの幼生(学生が捕獲)

生命科学科

上野 良平 准教授



富士山と街の
動画を見て
場所を推理するのが
マイブーム!

卒業研究では、学びの集大成として 誰も知らない現象の発見に挑む

「卒業研究」では、1〜3年次に学んだ知識を礎に自らテーマを決めて研究活動を行います。特に、2・3年次の「生命科学基礎実験」「生命科学実験」で身に付けた多様な実験手法を実践に移す機会です。学生たちは、さまざまな道具を用いて誰も知らない現象を発見したり、その仕組みを解明したりすることに挑戦。教員は、一人ひとりの学生が成長するためにサポートします。写真は、海藻成分の効果を、遺伝子レベルで調べているところです。1年間の卒業研究を終えるころには、学生たちは専門知識と研究力を備えた立派なエキスパートに成長しています。

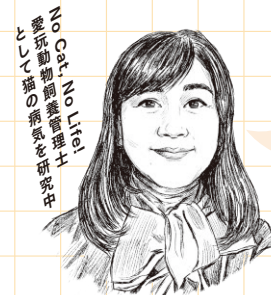


海藻成分の効果を調べる学生

教育人間科学部 Faculty of Education & Human Sciences

こども学科

三宅 美千代 講師



愛玩動物飼育管理士
として猫の病気を研究中

医療知識を身に付け 医療的ケア児への対応力も磨く

医療的ケア児支援法の施行により、保育所・幼稚園・学校では医療的ケア児の受け入れが進み、保育者や教員にも医療的知識と対応力が求められています。私は医療的ケアに関する研究やテキスト執筆で得られた知見を授業に反映し、「子どもの健康と安全」などにおいて、障害児保育・教育、学校保健、学校救急、エピペンの使用方法やアレルギー対応について実践的に指導しています。学生たちは事例検討や演習を通して、「医療×保育・教育」の視点から子どもの命を守る責任を学び、多様な健康課題を抱える子どもへの理解を深めながら、現場で求められる判断力と実践力を身に付けています。



学校救急を実践的に楽しく学ぶ学生たち

幼児保育学科

小林 咲里亜 助教



学び合いの
環境づくりに
力を入れています!

子どもの「やってみたい」を 引き出す保育者へと成長中

「幼児と表現(身体表現)」の授業では、歌や手遊び、触れ合い遊び、さまざまな素材遊びなどを通して、表現活動を行います。触れ合い遊びや新聞紙を使った創作活動では、自分の思いや感じたことを身体で表現し、仲間と共有する経験を重ねます。一人では思いつかなかった表現も、仲間との関わりの中で広がり、新たな発見につながります。また、子どもが安心して表現するために必要な環境や関わりを考え、保育者としての視点を養います。学生たちは体験を通して、安心感や信頼関係が表現を豊かにすることを実感しながら、子どもの思いや表現を受け止める保育者へと成長しています。



“触れ合い”を通して広がる表現活動

学校教育学科

持田 尚 教授



Contra
(内なる火)が
燃え続ける理由を
常に考える!

教える力と人間力を 教育現場で学ぶ

持田ゼミ(S-Edu Lab)では、「身体からはじまる学び(Embodied Learning)」を理念に、スポーツ・教育・地域をつなぐ実践と研究を進めています。オープンキャンパス特別プログラム「Playする感性」では、スポーツ・アート・教育を融合した場を学生が企画・運営。親子運動教室では、「走る・跳ぶ・投げる」といった基本動作をゼミ学生自らが指導しました。準備どおりに進まない現場で対話し、役割を担い、実践を振り返る経験を重ねることで、教える技術だけでなく、他者を理解し、自ら問いを立てて行動できる教師・指導者へと成長していきます。



スポーツとアートをつないだ学びの場

理学療法学科

佐野 徳雄 講師



考え方や
マネジメントを
動画で楽しく
学んでいます。

臨床で生きる知識やスキルを 教員からじっくり学ぶ

2年次前期科目の「理学療法評価学実習Ⅰ」では、患者さんの状態を把握するために不可欠な検査・評価の技術を学びます。例えば、筋力の程度や関節がどの程度動くかなど、これまで学んだ知識を基盤として、実際の測定方法や結果の解釈方法について理解を深めます。4名の教員が常に指導に入ること、臨床に基づいた実践的な知識と技術を丁寧に指導します。また、デモンストレーションや動画、小テストを取り入れ、学習内容の定着を図っています。学生も積極的に質問に訪れるなど高い意欲で取り組んでおり、仲間と支え合いながら将来に直結する力を着実に身に付けています。



真剣かつ楽しく取り組む実技指導

柔道整復学科

小池 祐貴 特任助教



スポーツ科学
×生体AIの
可能性は!?

教科書通りにいかない現場で、 自ら考え、動けるトレーナーへ

東京西キャンパスでは2025年度より日本スポーツ協会公認アスレティックトレーナーの資格取得課程を開講し、2026年6月現在、2学年合わせて75名の学生が学んでいます。私が担当する実技・演習科目では、日本代表チームへの帯同経験を活かし、現場で実際に起きた具体的な事例や課題を取り上げながら、原則を理解するだけでなく、教科書通りにはいかない状況にどう向き合うべきかを学生自身が考えられるよう指導しています。教科書の知識と現場での事例を結びつけて、座学と実技を統合的に理解し、現場で自ら考える確に対応できる人材の養成に力を入れています。



トレーニングを実践する学生への指導風景

作業療法学科

澤田 有希 講師



生活が
ちょっと楽になる
工夫・器具が得意!

車椅子の利用や 介助のハードルを体験する

「住環境整備・支援機器と作業療法」では、基準寸法に基づいた環境を再現した車椅子体験を実施しています。スロープ勾配1/12や廊下幅75cmといった基準を満たした環境でも、実際に車椅子を操作したり、介助したりすると想像以上に負担が大きいことを体感し、対象者の状況に応じて環境を見直す重要性を学びます。体験を通して、臨床に必要な知識・技能だけでなく、「なぜ使いにくいのか」を考える科学的思考力が養われます。また、対象者一人ひとりへの理解を深め、より良い支援方法を探る力を磨きます。



「住環境整備・支援機器と作業療法」の授業場面

看護学科

橋本 容子 講師



自分らしさを
言語化するの
楽しい……

カードゲームを使って 自分らしい人生を考える

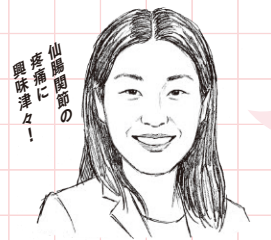
在宅看護学では、3年生を対象に「もしバナゲーム」を用いたグループワークを実施しました。学生は人生の最終段階で大切にしたいことや不安、家族との関係について考え、互いの価値観を共有し、「どう生きたいかを考える大切さ」「選択だけでなく諦めることの難しさ」「価値観に正解はないこと」などを学び、自分の思いを言葉にする難しさも実感しました。また、ACP(アドバンス・ケア・プランニング)が終末期だけでなく日頃からの対話によって築かれるものであり、その人らしい人生を支えるために、相手の価値観を尊重しながら共に考える看護職の姿勢の重要性について理解を深めました。



「もしバナカード」を使って
「自分ならどう生きたいか」を考える学生たち

東京 理学療法学科

関根 千恵 講師



仙腸関節の
疼痛に
興味津々!

コミュニケーション力や文章力も、 卒業研究で総合的に高める

本学科では4年次で「卒業研究」に取り組みます。ゼミごとに多様なテーマで研究を行っており、私のゼミでは超音波画像診断装置を用いて、月経周期における体幹筋機能の変化を検討し、女性が月経周期によってさまざまな身体的・精神的症状を生じる要因を探究しています。学生は卒業研究の過程を通して、測定を行うだけでなく、被験者さんとのコミュニケーションやデータの解釈方法、文章の書き方などを複合的に学んでいます。研究は時に、思い通りにいかないこともあります。教員と一緒に課題を解決しながら研究を遂行することで、学生が主体的に考える力を身に付けられます。



腹斜筋群の画像を撮影しています

東京 柔道整復学科

濱田 淳 准教授



私も大学生の頃、
心労が……

4年間の実践教育で 現場で評価される即戦力を

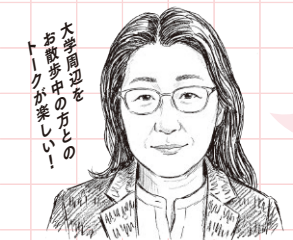
本学科では、知識の修得だけでなく、柔道整復師に必要な観察力・判断力・技術力を養うため、実習講義の充実にも力を注いでいます。1年次は包帯法などの基礎技術を学び、2・3年次には全身の損傷に対する診察・整復・固定を実践的に修得。4年次では広い視点からの総合的な実践力を身に付けます。こうした一貫教育は、卒業後の進路先である接骨院や整形外科などの研修先からも「即戦力として動ける」と高く評価されています。学生たちが患者さまと確かな信頼関係を築き、社会に求められる柔道整復師として巣立っていけるよう、時に厳しく、時に温かく指導に当たっています。



3年生における診察・整復・検査の実習風景

医療福祉学科

井岡 由美子 講師



大学周辺を
お散歩中の方との
トークが楽しい!

地域で学び、 仲間と成長する福祉専門演習

「福祉専門演習」は1年次の必修科目で、6名の教員が担当しています。医療福祉学科の学位取得に向けたゼミナール体系の最初に位置し、「福祉科学セミナーⅠ」での地域活動を念頭に、足立・千住地域の現状を体験的に学ぶとともに、地域課題に気づくための興味や関心を醸成することを目的に授業を展開しています。学生同士の仲間づくりや大学生活に慣れるためのプログラムも組み込み、より良い学生生活となるよう進めています。地域清掃(写真)は、例年の活動として定着し、地域の皆様からも励ましの言葉などをいただいて学生の喜びにもなっています。



大門商店街での地域清掃活動

「まなび」を支える 3つのセンター

総合教育センター

総合教育センター 小林 亮太 講師

総合教育センターでは全学的な教養教育を担い、世界を広く深く捉える力を育てています。私は、実技科目「健康体育」と座学科目「健康と生活」の連携を重視した授業を展開しています。実技では、スポーツを通して自身の生活習慣や社会性を振り返り、他者との関わりの中で、社会で活躍するために必要なコンピテンシーを育むことを目指しています。座学では運動や食事、睡眠、メンタルヘルスなどの基礎知識を共有し、事例に基づくグループディスカッションを経て、集大成となる健康プログラムを作成・発表する機会を設けています。授業には、私の専門分野である動脈壁の硬さを示す「動脈スティフネス」と運動、睡眠、食事に関するエビデンスも取り入れています。学生の皆さんには、本学の理念「いのちをまなぶ」を体現し、自らの心身を適切に管理して、健康的な生活を主体的に実践できる力を養ってほしいです。

「詩吟×健活」をテーマに行われた多摩市詩吟連盟の
春季大会で快眠健康講話を行いました

教職センター

教職センター 鈴木 貴史 教授

教職センターは、全学的に教員をめざす学生の皆さんのキャリア支援を行う専門的な部署です。教育学を専門とする専任教員と、小中高等学校で管理職などを経験した教員(特命教授)で構成されています。専任教員はおもに生命環境学部の教職課程を担当し、教科専門性と実践的指導力に優れた教員の育成に取り組んでいます。また、特命教授を中心として、2・3年次の早い段階からの教員採用試験対策を実施しています。一次試験に向けた筆記試験対策だけでなく、二次試験に向けた小論文や面接対策は少人数で実施され、きめ細やかな指導に取り組んでいます。皆さんには、これまでの先輩方と同様に教職センターを十分に活用していただき、教員になる夢を実現させてほしいと願っています。



教員採用試験・小論文対策の指導の様子

医学教育センター

医学教育センター長 高田 雄三 教授

医学教育センターの教員は、基礎医学や臨床医学に対して、最新の研究や自身の研究成果、医療現場での診断・治療から得られた知識や経験をもとに、各学科の教員と連携して講義および国家試験対策に取り組んでいます。これら国家試験問題の礎となる学問の知識をしっかりと固めることが合格への近道と考えています。また、アクティブラーニングやグループ学習といった多彩な教育を通して、自主性があり周囲の人と協調した連携がとれる優れた医療人になるための土台をつくり、あらゆる可能性を想定した柔軟な発想で問題解決できる応用力や臨床実践力を修得できるように努めています。そして、国家試験に合格することのみならず、社会で活躍でき、医学と医療の発展に寄与できる実力のある人材を送り出したいと考えています。



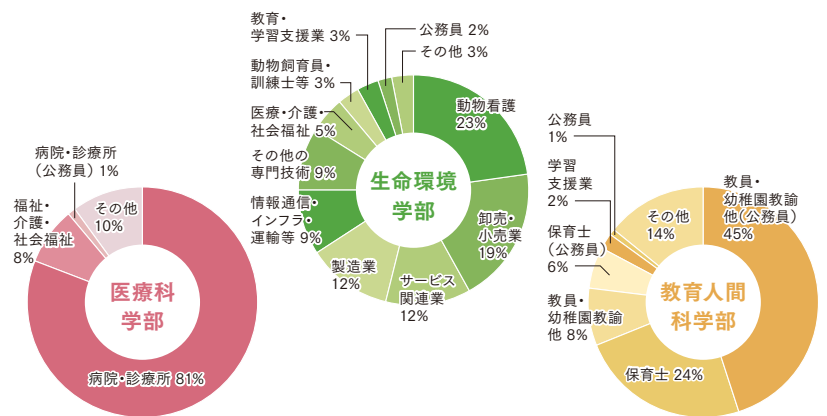
解剖学の講義の様子

キャリア支援センター

親身な面談や充実した情報提供など、多角的なサポートによって学生の夢を手厚く応援。在学中はもちろん、卒業後まで一人ひとりに寄り添うキャリア支援を行っています。

就職実績 (2025年度卒業実績)

2025年度の就職市場の状況は学生にとって大変有利に働きました。本学に届いた求人数は53,000件を超え、本学史上最高の求人依頼件数となりました。本学の就職希望学生のほとんどが就職先を決定しています。生命環境学部は「動物」、「環境」、「食品」系統などを主な就職先を選んでいきます。医療科学部では、国家試験合格者のほぼ全員が、医療・介護・社会福祉関連への就職を決めています。病院、介護施設、療育施設、接骨院などが主な就職先です。教育人間科学部は、教育学習支援業(教員)、医療・社会福祉事業(保育)に就職しています。教員90名をはじめ、幼稚園教諭13名、保育士44名、学童指導員5名と、教育・保育分野での活躍が期待されます。



就職率

本学の就職率は昨年(99.3%)、一昨年(98.6%)と過去最高の就職率を更新しました。2025年度の就職率は97.5%で昨年比1.8%減です。今年は過去最高の求人依頼件数で、就職率、求人件数を見ても就職環境は良好で、早期から就職活動を行った学生は就職活動終了の報告も早かったです。一方、単位不足や就職への準備不足、卒業研究、国家試験対策を優先した学生は就職活動に苦労した傾向があります。

キャリア支援センターの取り組み

キャリア支援センターは、学生の「未来」を学生と一緒に考える場所です。学生一人ひとりの「気持ち」や「想い」に寄り添い、支援するように努めています。学生面談を中心に、就職対策講座等のガイダンス、学内業界セミナーなどを実施し、学生のキャリア支援に取り組んでいます。学生が社会に出る最後の場所として、学生の未来を支援するよう、全力で取り組んでいます。

近年の就職活動の特色

一般企業に関しては、3年次の夏期休暇中に始まるインターンシップ選考が、実質的な就職活動のスタートとなります。その後に早期選考、通常選考と続き、4年次の6月の大手採用選考でひと段落します。公務員に関しては通常の採用試験以外に早期枠やSPI枠、経験者枠など、受験回数が複数化されています。最近では願書のネット受付や録画面接など多様な選考方法に対応することが必要です。

本学学生の特徴

学生と面談をすると、大学での学びを活かす仕事に就きたい気持ち伝わってきます。企業・施設様からの学生評は「真面目」「素直」「努力する」などの評価をよくいただきます。特に仕事への取り組み方を評価いただく事が多いです。実習などでコミュニケーション能力の向上を図り、卒業研究、国家試験に粘り強く取り組むなど、物事に対してひたむきに取り組む学生が多いと感じています。

大学院

科学技術・医療の教育研究を通じて、
広く社会と人類の発展に貢献することを目指します。

詳しくはこちら



Graduate Student

理工学研究科(修士課程) 環境マテリアル専攻 1年
王 治淇 さん

私の研究は、日本でも有数の富栄養湖沼である印旛沼や手賀沼における長期間の水質データを分析することです。これまでに公表されている水質に関するさまざまな環境因子同士や降雨量などとの関係性を調べ、富栄養化の原因や水質の長期変動の解明と改善策の検討を行っています。中国の大学に在学中から水環境問題に関心を持っていた私は、本学に水環境を専門にしている先生が存在していることを論文で知り、進学を決意しました。先生は専門知識が豊富で、日本語に慣れていない私にも丁寧に指導してくれます。恵まれた研究環境の中で学べることを幸せに感じています。今後は、現在の研究テーマに関する学位の取得をめざすとともに、得られた知識と経験を活かしてさまざまな水環境の保全と改善に貢献したいと考えています。



Professor

生命環境学部 自然環境学科
橋本 慎治 教授

王さんは、中国・江蘇省の常州大学で、染料工程から排出される廃水処理システムの設計に関する卒業研究を行いました。その研究を通して、廃水に含まれる有機物や色素の処理の重要性を学び、水環境における窒素やリンの負荷に強い関心を持つようになりました。現在は、日本でも特に富栄養化が進んでいる印旛沼・手賀沼を対象に、栄養塩濃度や富栄養化の長期変動について研究しています。両湖沼では生活排水や農業排水が主な窒素負荷源とされていますが、長期的な水質変動を統合的に評価した研究はほとんどありません。今後は、印旛沼・手賀沼の富栄養化の要因や長期変動を明らかにするとともに、効果的な対策や地球温暖化が湖沼の水質に及ぼす影響についても解明することが期待されます。

卒業生に会いに行く



野生動物の行動を記録するセンサーカメラ調査



クマ学習会の様子(保育園)

正しい知識が、人と自然をつなぐ

ツキノワグマの研究を始めたきっかけは？

もともとトラなどの大型野生動物に興味があり、森貴久先生の研究室に入りました。「何の動物を研究したい？」と先生に聞かれ、とっさに答えたのがツキノワグマです。人間の安全とツキノワグマの保全の両立について研究を深めました。山梨県の取り組みとも連携し、目撃や捕獲情報の分析のほか、捕獲個体への発信機装着など、実践的な管理業務にも参加。現場でしか得られない貴重な経験を積めました。アニマルサイエンス学科の2期生だったこともあり、前例のないことに挑戦する機会が多く、やりたいことを自由に学べる環境だったと思います。

卒業後の歩みを教えてください。

研究対象だった野生動物とは対照的な産業動物の実情も知っておきたいと考え、卒業後は酪農の仕事に就きました。その後、野生動物に関わる仕事を志し、在学中から所属していたNPO法人信州ツキノワグマ研究会の研究員に。活動のなかで特に重要だと感じたのは、ツキノワグマについて正しく伝える普及啓発です。より正確な情報を発信するには、自身の知識をさらに深める必要があると考え、2009年に信州大学大学院へ進学。畑に残された野生動物の痕跡に対する農家の対策が適切かを調査し、農家の方々に直接話を聞きながら、生のデータ収集に力を注ぎました。

現在はどうような仕事をしていますか？

平日は開発や管理事業にともなう環境調査を行う会社に勤務し、哺乳類担当として野生動物の生息状況や動物相の調査、自然観察会の運営などに携わっています。休日は、信州ツキノワグマ研究会の活動にあて、長野県のクマ対策員(特別職員)としても活動しています。本来、ツキノワグマは慎重で穏やかな生き物です。その生態を正しく知り、適切な距離を保つことで大きな事故を防げます。正しい知識を伝える存在として、今後も活動を続けていきたいです。大学時代に学んだ「自ら道を切り開く」という精神が、いまま私の行動指針になっていると感じます。

在学生へのメッセージをお願いします！

やりたいことがあるなら、ぜひまっすぐ挑戦してほしいと思います。できるか、できないかを考える前に、まずは一歩踏み出してみてください。帝京科学大学は、学生の「やりたい」という気持ちを大切に、挑戦を応援してくれる大学です。私自身、大学時代から20代にかけて、後先を考えずにさまざまなことにチャレンジし、その経験や出会いが、いまにつながっています。

濱口 あかり さん

理工学部(現・生命環境学部)
アニマルサイエンス学科
2005年度 卒業

在学中からツキノワグマの研究に関わり、4年次にはNPO法人信州ツキノワグマ研究会会員となる。2007年より同研究会の研究員として、ツキノワグマの調査研究や被害対策、普及啓発活動に従事。2011年3月、信州大学大学院農学研究科森林科学専攻修士課程を修了。現在は株式会社環境アセスメントセンターに勤務する傍ら、信州ツキノワグマ研究会でも精力的に活動が続けている。

Letter to 両親への手紙 Parents

お父さん、お母さんへ

大学4年生になり、卒業や国試が近づく今、これまでの日々を振り返って改めて二人の支えの大きさを実感しています。

高校3年の12月というギリギリの時期まで進路に迷い、獣医や看護など様々な分野で悩んでいた私を、二人は焦らせることなく信じて見守ってくれました。あの時、迷いながらも帝京科学大学の作業療学科への進学を決めて、本当に良かったと心から思っています。

大学での4年間は、想像以上に濃密で、私を大きく成長させてくれる日々でした。専門的な勉強は難しいことも多く、時には壁にぶつかることもありましたが、人の心と身体に寄り添う作業療法の奥深さに触れ、「この道は自分に合っている」と確信できるようになりました。同じ目標を持ち、苦難を共に励まし合いながら乗り越えた大切な仲間に出会えたことも、私にとって強い支えとなりました。

そして何より、毎日お弁当を作って応援してくれたお父さんとお母さんの存在が、私の最大の原動力でした。私が落ち込んだ時には、いつも明るく前向きな言葉をかけてくれ、どれほど心強かったか分かりません。

実習をすべて終え、あとは国試という最後の山場を残すのみです。大学生生活で得た学び、経験、仲間という財産を胸に、これからも目標に向かって一歩ずつ進んでいきます。本当にありがとうございます。

小沼 紗弥 さん
医療科学部
作業療学科 4年